

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ: ニュース・レターNo.47(2017年7月号)◆

梅雨の候、すでに暑い日々が続きますが、皆様にはご清栄のこととお慶び申し上げます。『Intelligence』購読会員の皆様は、機関誌『Intelligence』第17号、そして会員向けブログ、ニュース・レターなどをご愛読いただきありがとうございます。さて、次号『Intelligence』第18号の投稿原稿を募集しております。締め切りは、9月末です。日中映画交流史などの特集を企画しておりますが、自由論文も歓迎いたします。投稿をご予定の方は、事務局まであらかじめご連絡頂ければ幸いです。

会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

**【ブログ用エッセイ募集】**会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。第15回赤見友子さん、第16回松岡昌和さん、第17回阪本博志さんと、続々とリレー連載も回を重ね、興味深い研究の逸話、資料などが紹介されております。どうぞ閲覧の上、「拍手」をいただけますと、励みになりますのでよろしく願い申し上げます。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

**【第112回研究会】**(5月27日(土)午後2時30分～5時30分)

・佐藤洋一(早稲田大学)「わたしの写真がみんなの写真になるとき～占領期の個人写真を通して」  
米フロリダ州立大学の機関 Institute on WWII and the Human Experience が所蔵する「オースティン・コレクション」の写真、約1000枚を悉皆調査した経験に基づき、公的な目的で撮影されたわけではない占領期の写真が持つ開かれた議論の可能性に焦点を当てた発表。また、私的に保管されてきた写真資料を公開するにあたり、研究者単独の作業ではなく、SNSを通じた在野の研究者との協働の在り方や、どのようなキュレーションが必要となるのかについても言及された。

・Sharalyn Orbaugh(ブリティッシュ・コロンビア大学文学部アジア研究学科教授)「国策紙芝居の女性」  
[通訳: 前島志保(東京大学)]

紙芝居というメディア、特に国策紙芝居は、15年戦争期に各地の街頭などで、子供だけでなく大人にも向けて、強力なプロパガンダ・ツールとして上演された。吉田春、鈴木則子、稲庭桂子などの作品においては、そのメッセージには、女性が多く登場し、国債購入を促すものであったり「軍神」の母の息子の戦果を称揚するものがあつた。しかし、そのレトリックは、海外のものと比較しても、例えば、日本では「ぜいたくは敵だ」との宣伝文句のところ、イギリスでは「Beauty is duty」というように、女性性の見せ方が大きく異なり、戦時宣伝を比較分析する上で興味深い報告であつた。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。  
<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

次回 第113回研究会は7月29日(土曜日)午後2時30分～5時30分、早稲田大学 早稲田キャンパス 3号館 809号室にて、サム・ティンスキー(ウイスコンシン大学歴史学部博士候補生)「料理を楽しむ: 『週刊ポスト』におけるジェンダーと過労死に対する反応としての『男の料理』」、吉田文彦(東海大学名誉教授)、小川恒夫(東海大学文学部教授)、羽生浩一(東海大学文学部教授)「中国・人権問題の報道におけるニュース・ソース: 『ニューヨーク・タイムズ』と『朝日新聞』の比較、2007-2009年」、加藤哲郎(一橋大学名誉教授)「戦後日本の時局雑誌『政界ジープ』対『真相』」の、諸氏の報告が予定されています。

### 【コラム:日本の「民主主義」はどこに行く?】

シドニー郊外のウーロンゴン大学において6月27日から30日まで開催された JSAA(オーストラリア日本研究学会)に参加した。隔年開催で2年前は戦後70周年記念であったが、今回は「日本の民主主義」が大テーマである。折しも都議会選挙の直前であり、「シールズの言葉」をテーマとするパネルなども組まれていたが、キーノートでは近年の日本の政治、文化を危惧する発言があいついだ。

私は「青い山脈」(石坂洋次郎、1947年)について報告した。いまさらながらテキストと同時代批評を再読して、いささか暗澹たる心地がした。私たちは少しはマシな社会を作り出せたのか、何を若い人たちに受け渡していけるのか。とくに気になったのは同時代批評の一部に見られる、大衆文学・大衆文化、女子供文化に対する蔑視であり、「民主主義という舶来のバケモノ」(臼井吉見「ガンちゃんの人生観」)などと言っている対米自立派知識人(?)の勇み足である。アーリーモダニズムやら昭和モダニズムやらの潮流も、内発的な民主主義の萌芽も、彼らの眼中にはなかった。その手の冷笑主義がなにをもたらしたか。陳情や、投書や、デモや、選挙といった手続きを重ねてやってきたらしい21世紀の戦後民主主義解体のパワーに対して抗う余地はないのか、あるのか。日本研究の現在を通じて日本の国際的地位の低下を実感しつつ、考え込まずにいられなかった。

(文責:川崎賢子)